薬　事　日　報　　2014（平成26）年7月4日　金曜日

レベル高い薬剤師養成を

薬学教育の世界的潮流紹介

城西国際大・講演会

城西国際大学薬学部は6月25日、都内の同大紀尾井町キャンパス講堂で講演会「薬学教育、薬剤師研修における世界的潮流」を開いた。国際薬剤師・薬学連合（FIP）から薬学教育開発チーム責任者のイアン・ベイツ教授（ロンドン大学）とプロジェクトコーディネーターのアンドレア・ブルーノ氏が、薬剤師および薬学教育の国際的な動向、FIPで薬学・薬科学教育に関する活動をまとめる組織・FIP教育イニシアチブ（FIPEd）の取り組みなどについて講演、薬学教育関係者や薬剤師、学生らと活発な討議を行った。

ベイツ氏は、世界の各国で薬剤師が不足傾向にあり、各国間で薬剤師が移動するようになっていると現状を指摘。また、人口比で見ると各国間でのバラツキが大きくなっていることや、男女比では女性薬剤師の方がやや多い傾向にあり、学生レベルでも65～70％が女性であることを紹介した。さらに、高所得や経済が豊かな国ほど薬剤師および医薬品の使用量も多い傾向にあることなどを示した。

一方、全世界的に医療制度改革が進められており、その背景には経済的な制約、医療従事者の構成を変えていきたいとの考えがあり、薬剤師にとっても変わりつつある医療体系の中で、順応していかなければならないとした。

それらを踏まえ「政府当局、国民に対し、われわれの持てる能力、つまりコンピテンシーを示すことができなければならない。そのため専門職としての教育、研修が重要になり、学部教育のあり方も変える必要が出てくる」と強調した。CPDのプランニングもこれまでとは異なるものが必要になってくるとした。

ベイツ氏

また、「それら全てを考えると今、結果が重要であり、そこに注目しなければならない。すなわちコンピテンシーを実績に結びつけていかなければならない」と述べると共に、実践に焦点を当てた教育の重要性も指摘。「日本での薬剤師の業務がどこまで効果的なのかを考えてもらいたい。そこに従事する薬剤師が医療にどれだけ貢献しているか」とし、薬剤師による具体的な成果を示していくことの重要性を指摘した。

コンピテンシーとは、知識、能力、才能、態度・価値観・信条といったもの全てを併せ持ったものを言い、その上で効果的、かつ持続する行動が求められるとした。そのためには教育研修が重要であり、国際的に共通した「教育のための枠組み」が広がりつつあることを示した。

事例として英国の王室薬剤師協会での取り組みを挙げ、より上級の薬剤師としての実践者を強化する薬学部としての課程を作っていることを紹介した。

さらに、「薬剤師を含めた医療従事者が発展していくためには、専門職としての評価、透明性、最終的にどこにたどり着いたかではなく、どうやってたどり着いたかを評価していくことが重視されている。大学教育は初期教育を提供するところ。大学、雇用主・企業側、われわれ専門職の機関・団体というのが、パートナーとして互いに協力し、生涯教育に携わっていかなければならない。忘れてはならないことは、教育が命を救うということ」と述べた。

人間性豊かな人材に

質疑では、薬学生から、どういう薬剤師を目指すべきか見えてこないとの意見があり、アンドレア氏は「時間を見つけてネットワーク作りを進めてほしい。（学校の）成績だけでなく、自分のスキル、態度、そして自分自身がどういう人間か、患者にとってどれだけ良い人間かということが大事」とし、様々な人の関係を広げ、人間性を豊かにすることの重要性を指摘した。

アンドレア氏

また、日本同様に政府の力が強く、教育の自由度の低いイギリスでいかに改革がされたのかとの質問があった。

ベイツ氏は、「政府は患者の安全性と経済性を重要視しているが、医師、薬剤師、歯科医師に対し全てを整理しろと要求してきた。また、コンピテンシーが不十分であるために、患者が死亡しているとのエビデンスを示してきた。その中で、いくつかの概念が生まれてきた。今はレベルの高い医師は薬剤師を味方に付けずに戦場に出ることはなくなっている。家庭医も、特に慢性疾患の患者に対しては薬剤師に面倒を見てくれと求めるようになった。その際に薬剤師に処方権を持たせている。また、薬剤師により処方が変わってきた」とした。